

あの頃を顧みて

古澤基生

昭和の年数が二桁に変わった頃在学した筆者には、当時の同志社は九十年の長い歴史の中で特筆さるべき時期であつたように思える。

京都大学教授の栄職をなげうって母校同志社の総長に非常な決意をもって就任された湯浅八郎博士は時に四十六才。東の慶応ではその頃四十代で小泉信三氏が塾長。東西私学の雄は壮年の学者を長に迎え注目をあびたのだつた。

湯浅博士は就任式において全学数千の学生を前に同志社の在るべき姿・未来の遠大なヴィジョンをあの雄弁でもって明快に力強く述べられた。

この若き新総長の就任は同志社に新風を吹き込み、長らく沈滞していたかに見えた同志社は脱皮して大飛躍を遂げるのだという期待が学園にみなぎった。

秋となり新総長の下、創立六十周年記念の

行事がいろいろ催された。当時は新島先生の直弟子の諸先輩が健在で続々母校を訪れ、記念祝典を一層盛んなものとした。日銀総裁の深井英五氏、言論界の徳富蘇峯氏、社会主義運動や野球界の恩人安部磯雄氏らはこもこも新島先生が真に偉大な先覚者であられたこと、また先生を通じて同志社から受けた恩恵を講演会で後輩たちに語られた。

海外からは新島先生のよき協力者だった故デビスの子息で当時エール大学新進の教授であつたデュロム・デビス博士は父君が一生を捧げた同志社の記念学術講演のためはるばる来日された。

また帰朝後間もなかった校友森本芳雄氏の指揮による同志社混声合唱団と校友で第一線に活躍していたソリストによるヘンドルのオラトリオ「メサイヤ」は本邦で初演と言われる大規模なものであつて栄光館と大阪中島公

会堂で二夜にわたつて演奏された。それは全国にも放送され、多大の感銘を与え、同志社の名をあげたのだつた。

当時の宗教主任堀貞一師（一回卒業生）は前記の先輩を迎えての記念祝典の席で栄光館前面の新島先生の肖像の前で「先生が今この世に在られたら……」と感激に涙されたのだつた。

筆者は在学中この栄光に満ちた同志社の姿に接し得たことは忘れることの出来ない感激であつたが、しかし、この輝かしき良き日は長く続かなかつた。

多彩な創立六十周年の記念行事の終つた数ヵ月後にはかの二・二六事件が起つた。巷間、決起部隊は自由主義・進歩的陣営の者やまた基督教の教会を襲撃するかも知れないとの噂がとんだ。それは噂に終つたが、当時はそのようなことも起り得る情勢であつた。

この事件後、わが国が国体明徴の国策に添い急速に軍国化していったことは周知の通りであるが、同志社はその標榜する基督教を徳育の基本とするゆえに白眼視されたわけである。

例の「神棚問題」「神社参拜問題」もこの

のこと。同志社建学の精神を昂揚し学問の自由を擁護しようとする総長に対する批判や反撥・外部からの圧力、これに乗じて配属将校が学生を使喚し、遂にはいわゆる右翼による学内ストライキに入るに至った。予科の学生を巧みにチャペルに追込み籠城してその要求を当局に迫る——その指導者の戦術の見事さは左翼のやり方だと評されたものだ。この事件と前後して日支事変が勃発、暗雲を一層深めたのだった。

かくて学内・外からの不条理な圧迫に対する同志社当局・総長の苦悩は非常なものであったに違いない。湯浅総長は「私は神が退けと御命じになるまでは断然身をひきません」と決意のほどを示されたが、学内のリベラルな教授が危険視されていた周囲の情勢のなかで新進の二人の教授が警察当局の調べを受けるという事態が起り、ついに総長は責任をとらざるを得ない立場になられた。

喜びと期待をもって迎えられたにもかかわらず湯浅総長は在任三年たらずでこのようにして退かれたのであった。その後単身海外の旅にでられ、その途次大戦が起った。戦後、同志社総長として復帰されるまで長い戦争の

間、御家族を故国に残し、御自身は外国に一人留まることを余儀なくされたと聞いている。

とかく戦争前・戦時中の回顧談は誇張され、また悲壯感を交じえてなされるきらいがある。軍・官憲に協力的であったとみられるある大学が戦後に自分らは断圧をうけたと称し、自由を守るためにいかに苦心したかと公言するさまをみて苦々しく感じたものだが、同志社においては既に述べたように戦前の最後の平和な時期から突如暗雲の中に入った感のするあの特異な時期に学園が直面したのは内・外からの真に不当な干渉と圧迫であった。まさにそれは「義のために責められる」ものの姿であった。

時は移り戦前・戦中経験したような言論や思想を束縛するものはなく、自由に伸び伸びと学問に専念できる環境が母校にあるはずだと思うのだが現実はそのでなく、何やら騒然とした空気が感ぜられる。「大学の自治」の名の下にいろいろな要求が学生から出されるらしい。なるほど大学は学生のものであるという考えも一応うなずけるが、その学生は変化し、流動するものである。四年後現在の同

志社の学生はほとんど変ってしまふ。しかもそれらの学生は責任を負うことをしないし、また出来ないのだ。

筆者は先年留学中、かの国の学生運動の実体を見たが、日本に比べて徹底しておると言えなくはない。ある問題で動員があれば全学が一致団結する。プラカードを持った真剣な面持はあるが殺気立つてはいない。騒々しさはない。実に整然として節度がある。しかも学生の結束の威力を充分に示しておる。

二年余の在米の後帰国直前、新島先生の学れたニューイングランドのアマスト大学を訪れた。同志社とは関係の深いこのアマスト大学は幾多の偉材を輩出した名門校の中のさらに名門である。

新島襄先生はぐくんだこの伝統に輝く大学は百年前新島青年が在学した頃と変りがないであろう同じ静かな落付いた付であった。大学にこの静寂な環境がなくて、どうして学問研究の場であり人間形成の場となり得ようか？ 母校が平和で落ちつきをもった静かな学園となる日を念願してやまない次第である。

(昭13英師卒・西南女学院短大英語科長)

堀貞一先生と梅花学園

鎌谷

巖



青雲の志を抱いて同志社の門をくぐったのは、昭和八年四月であった。

正面に見えるハイカラな、それでいてまるでお化け屋敷のような神学館の薄暗い教室で過した三年間は、今想い出してもなつかしい。今日のスシずめ教室とは隔世の感で、十四、五名の学生があまり広くもない教室にバラバラと席を占め——名ざされる率の多いのに閉口しながら——学んだあの頃の生活は忘れられない。しかし、その時教えていただいた教授方の大部分は、もうこの地上に姿を見ることができないのは寂しい。謹厳そのものの芦田先生からバルトのロマ書講義を受けること、むずかしいのと緊張とで体がコチコチに

固くなった。

口の中でブツブツ言いながらやたらに頭髪をかいてギリシャ語文法を教え、聖書神学を講義された富森先生、やや口をとがらせて理路整然と教会史を説き、日本精神に触発するキリスト教を語られた魚木先生、フツサールの人間学を、ふんだんに飛び出すドイツ語と共に聞いた浜田与助先生、お国なまりをそのままと、とつとつと地味ではあったが誠実そのものの本宮先生、たくみな日本語で時間から時間まで一分の割引きなしに教えられた旧約のカーブ先生、童顔そのものの社会学の竹中先生、いずれもこの地上ではも早お目にかけられない。その、今は亡き想い出なつかしい

人の一人に堀貞一先生がある。神学校に入つて二年目、神学生にもいろいろタイプがあり理論派・実践派・思索派・行動派・研究派・伝道派とさまざまであった。私はいわゆる福音伝道の実践を学内外で展開すべきであるというグループに仲間入りした。そのグループを「ステパノ会」と称し、石もて撃たれ殉教の死を遂げたステパノにつづけとばかり、学内でがなり立てた。神学館や有終館の前で路傍伝道したが別に石は飛んでこなかった。土居真俊、川島甚兵衛、先頃亡くなった森安忠之らが同志で、毎週のように祈りと伝道に打ち込んだ。

そのステパノ会を側面から応援して下さったのが堀牧師であった。あの独得のしわがれ声でしょっちゅうはっぱをかけられた。どこか水戸黄門を想わせる風貌をもって、何者をも恐れぬ一徹な信仰をぶちまけて行かれる先生の姿に接すると、一層伝道心をかきたてられ連日のように路傍に立つて先生ばりに熱弁をふるった。その私が現在つとめている梅花学園と梅花教会が、堀先生と浅からぬ関係にあることを知って、不思議な因縁——いな神の摂理に驚いている。これからしばらくその

因縁を語ってみよう。

*

今を遡る四十二年前、同志社教会は創立五十周年記念に特別伝道集会を計画、当時ハワイホノルルのヌアヌ教会牧師であった堀貞一先生を招いて特別学内伝道集会を開始した。昭和二年一月七日堀牧師は横浜到着、旅装を解く暇もなく九日から三週間にわたり連日連夜の伝道集会が行なわれた。その感化は驚くばかりで、当初、堀牧師を特別講師として迎えることに学園はいささか批判的、懷疑的でさえあったにもかかわらず、堀牧師の熱烈火を吐く弁説に学生はもろろん教員のうちに信仰を起す者、悔改める者が多くあらわれた。この連日の伝道集会は、二十三日、新島先生永眠記念日の暁、若王子山頭墓前における早天祈禱会においてクライマックスに達した。さてこの二十三日はちょうど梅花高等女学校創立記念日にも当り、梅花においても同志社出身である伊庭菊次郎校長は「新島先生に就て」と題して礼拝説教せられ、特に説教終って祈禱の際、学校職員および生徒多数が未だ信仰に入らないことを悲しみ、多数卒業生のために神の靈化に浴するようにと熱禱を捧

げられると、会衆は感涙に咽び、さながら信仰復興の状態であった。更に同日午後一時よりの同窓会には四、五十名の会員が集り、今回が校覚醒運動のため目下同志社に特別講師として活躍中の堀貞一先生を迎えたい旨発表、卒業生の靈的自覚を促す演説をされた。かくして連日祈禱会がつづけられ信仰復興の焰は燃え始めた。

堀先生は前述のごとく同志社における二週間の集会で多数の受洗決心者が現われ、そのフローアップに余念ない時、梅花高等女学校の懇請黙し難く、一月二十五日横井時雄、宮川経輝両氏を歴訪したのち梅花に到着、午前九時講堂壇上に立たれた。最初、伊庭校長は堀先生を全会衆に紹介し、先生を招くに至つて頌を述べられた。堀先生はおもむろに立つて自分がキリスト教に入信した経路を説明し、同志社を説き、新島先生に及ぶと舌端火を吐く勢いで九百名の会衆は酔ったように聞き入った。午後一時から第二回講演では午前の継続で一時間半の説教であった。二十六日午前九時および午後一時の講演は学校外の人々も多数聴講された。講演の趣旨は「ヨハネによる福音書十五章「真の葡萄」の譬を題とし、

種種興味ある例話を加え、同志社創立時代にかかのほり、新島先生の苦心惨胆自ら杖をもつて自己を鞭打ち、多数の学生を悔改めさせた犠牲の精神と結びつけ、説き来り説き去るに及んで先生自らインスピレーションの人となり、熱あがり焰となり、満場たちまち火の海のごとく聖靈の降下著しきを覚えた。講演後音楽教室において女子青年会の主催で求道者会を開き、堀牧師と木村清松牧師が出席され伊庭校長と辻忠良宗教主任が陪席した。出席者は二百五、六十名で、昨日および今朝来の説教に関して寄せられた質問の数々について両先生より懇切に説明が与えられ、二十七日午後の受洗志願者および求道者は姓名と学級を記して任意にこれを特設の箱に投ずるようすすめられ、決して強制的態度はなかったたのであるが、この調査で翌日の受洗者数は専門学校および高女を通じて八十七名となった。この日の講演で偉大なインスピレーションを与えられたため学内は昂奮状態となり、教員といひ生徒といひ非常に緊張し、一大リバイバルの有り様であった。この日教職員は特に茶話会を開き、両先生より懇切に信仰の勧めを受け、互いに意見の交換を行なった。

二十七日午前九時よりの講演は、盲人を癒し群衆に囲まれて通行されたイエスが、桑の木の上から見ていたザアカイに「急いで下りてきなさい、さよう、あなたの家に泊まることにしているから」と語られた話から説き起し、「各自はその心にイエスを宿さねばならぬ」と熱涙をふるって肉迫せられるとたちまち講堂は異状な空気に包まれ、木村清松牧師もまた熱烈肺腑をつくアップールをせられた。会衆の熱は前日に増してたかまり、説教が終ると学生、生徒は両先生を取り囲み、なお切実に教えを求め、さながら大リバイバルのごとき感を呈し、受洗申込みは前日の三倍以上となり、求道者もまた数百名に上った。

このため伊庭校長は特に堀先生に請うて洗礼式を執行、同志社における特別伝道集会で得た受洗志願者の洗礼式もまだ行なっていない折であったが、堀先生もこころよく承諾され二十七日午後一時講堂において洗礼式を挙げた。壇上には堀牧師と木村牧師が立ち、伊庭校長自ら親しく受洗者を点呼、堀先生は一人々々に授洗された。満堂靈氣溢れ、涙する者もあり、ペンテコステの日もかくやと思われた。受洗者は教職員七名、卒業生二名、学

生生徒三百三十五名、計三百四十三名の多数に上り、授洗の時間は三時間半以上の長時間に及んだ。堀先生は感涙にむせびつつ沢山保羅先生在天の靈も喜び給うにちがいない。先生の精神が減びないで今日あるを得、この十数年校長の苦心、忍耐、信仰、また諸牧師の播かれた種子が今日この実を結んだことを感謝すると祈られると満堂声を挙げて泣いた。

剣持省吾牧師は感動にたえず、受洗者の総起立を求め、熱血を注いで感謝を捧げ、伊庭校長また十数年の苦心が報いられたのは神の恩寵によるものであり、特に教員諸氏の受洗を見たのは数年来熱涙をもって祈ったその祈りを聞き給うたのであると感激し、全校のためイエスの十字架に従うとの決心を披^ひ歴し、改めて一同の感動を呼んだ。かくして伊庭校長の祈り、木村牧師の祈禱をもって劇的な洗礼式を閉じた。式後受洗者一同は講師を中心に記念撮影をなした。同日午後六時半より職員一同は宝塚ホテル食堂にて堀牧師の慰労会をなし、辻宗教主任の謝辞、堀先生の答辞あり午後九時散会した。なお受洗者が未曾有の多数に上ったので、今後の処置について堀、木村両牧師とも協議し、学校教会の組織を促進

することとなり、一月三十日の聖安息日に聖餐式を行ない、受洗した教員、学生等相協議し善後策を講じた結果、独立の教会を組織し組合主義をとることとし、或時機を見て組合教会に加入することに決した。

*

同志社教会創立五十周年記念伝道集会の特別講師として招かれた堀貞一先生の二週間にわたる目ざましい活動の結果、多数の受洗決心者を出したが、梅花高等女学校の特伝にも当られたため、洗礼式は梅花よりもおくれて一月三十日と二月六日の二回の礼拝に分けて合計三百三十八名が洗礼を受けた。その前に既述のように梅花での一週間の特伝で三百四十三名の受洗者を出したのである。関西の地京都と大阪ではほとんど同時にこのような多数の受洗者が出たのは、古今未曾有のことである。

この堀先生による伝道が、同志社、梅花両学園全体のキリスト教精神昂揚に寄与したことはまことに大であり、一方また日本の教勢振興に与えた影響も決して少くなかったのである。

同志社はこの五十周年記念伝道を契機に堀

先生を同志社教会の牧師、同志社宗教主任として招聘し、梅花はこの靈化運動以來学校の精神的調子はますます深みを加え、校内の空氣は著しく宗教的に濃厚となった。その結果職員および学生の貧弱な手より公然と梅花キリスト教会を設立するに至ったのである。

すなわち校舎の北に三百坪の敷地を定め、北野校舎の講堂を移し、梅花教会として使用することに決した。これより先十月十三日堀貞一牧師就任式が同志社教会で行なわれ、梅花会員十三名が出席して祝意を表した。

いよいよ十一月に入り建築は竣工、十一月二十日梅花散会設立も最も深い影響を与えられた堀先生を迎えて新設の会堂で最初の礼拝を守った。午前九時半辻牧師の司式で伊庭校長の献堂の祈禱あり、堀牧師は「神の宮殿」と題して一時間、平易にして靈氣溢れ、人の肺腑に迫る説教をされ多大の感動を与えられ同師の祝禱で閉会した。この日会衆二百名を越え新会堂は立錫の余地もなかった。

梅花学園は今年創立九十周年の記念すべき年を迎え、今秋記念式典を挙行する。外形的な発展も喜ばしいことながら、幾多困難に遭いながらもキリスト教精神を貫き、毎日の礼

拝を欠かさず守り、毎年五十名程ではあるが受洗者を与えられていることは更に喜ばしいことである。

梅花教会も今年は創立四十一周年を迎えたが、堀先生のまかれた福音の種子が実を結んでいることを感謝している。あの時の受洗者の一人井筒寿子姉は現在梅花女子大学日本文学科教授兼宗教部長であるとともに梅花教会の役員として奉仕している。堀先生がそのことを知られたらどんなに喜んで下さるであろう。今日、堀先生のようなタイプの伝道者はほとんど見かけない。皆一廻りも二廻りも小型になつてしまった。キリストを指さして、がむしやりに人々を引きずりこんでゆく堀先生のひたむきな伝道心を大いに学びたい。とにかく堀先生によって同志社と梅花学園同志社教会と梅花教会は奇しき因縁に結ばれて今日に至っていることはいつまでも覚えておきたいものである。

(昭和11大卒・梅花短大校長)

* * *

同志社時報

第31号

座談会	「同志社を語る」……………今中次磨 ¹⁾ 同志社教育と国家の問題……………土肥 昭夫 学生と表現能力……………木枝 燦
人物誌	「片岡健吉」……………高橋 信司 平安教会の創立時代……………小野 一郎
画と文	「マルセル・マルソーを通しての自画像」……………山口 洋司

随 想・新刊紹介・私の研究ほか
一部 100円 年6回発行

歴史の流れと台湾教会

高 明 音

日本で台湾の歴史文化について問われる度に、わたしはいつも惨めな思いをしてみました。それらを教えられたことも、本で読んだこともなく、学ばされたのは統治者側の歴史——日本史、中国史でした。日本にきてはじめて自分の育った土地の歴史に関心をもち、とくに基督者として台湾の教会史に関心を寄せるようになりました。そして教会は台湾人が植民地下に呻吟し、被植民地人として訴えるところを失っていた時、どんな慰めを台湾人に与えたか？ なぜ短くない日本統治の五十年間、台湾の教会は日本の教会と深い契りを結ぶことができなかったか？ また、日本の教会は日本帝国統治が終焉を告げた時、統治者と共に、何ものこさず去っていったのではないだろうか？ と一クリスチャンとして、佻しい疑問に包まれるのです。

日清戦争の結果、台湾が日本に割譲された

一八九五年は、台湾の基督教会が、イギリス宣教師による伝道三十周年を迎えた頃で、基督教はまた台湾民衆の中で異端視されていた時代でした。日本軍の台湾上陸と、それに反対する抵抗運動で、台湾島中騒然としていました。そして日本軍が台南城に迫った時、徹底抗戦を叫んでいた清国武官劉永福が逃亡し、その麾下の下級兵士は略奪、暴行をはじめ、台南城は非常な混乱に陥りました。それで一部台湾人富商の懇願によって、イギリス人宣教師バークレイ (Thomas Barclay) は、日本軍に台南城の混乱を説明し、早急に台南へ入城するよう懇請したのです。このことがあってから、日本軍は抵抗軍、または匪賊の討伐に際して、教会を避け、信者に対する虐殺は行なわなかった、といわれております。しかし、新しい外来統治者に對し、狩獵用の火繩銃や、庖丁を結びつけた竹竿を持ち出

し、生命を賭して反抗した台湾人の目には、もともと異端視されていたことと相まって、宣教師とクリスチャンは、新たな権力とすぐ結びついた「奸民」とうつり、これら反抗者はたびたびクリスチャンに対する殺害行為に出ました。

バークレイの入城案内という行動によって日本軍はかれを勇氣ある人として賞讃し、その後の布教において、日本当局より大いに便宜をはかってもらいました。かれは乃木將軍と親交を保ち、大年四年に勲五等双光旭日章を授与されています。しかし、長い歴史の流れ、または民族的感情から眺めた場合、かれの行動は、むしろ一般台湾人をして、クリスチャンに対する疑惑の目を招いた原因となっています。一般台湾民衆の心を忘れた宣教師と評価するのは不当でしょうか。

更に一例をあげますと、同じく宣教師のフアガソン (D. Ferguson) は日本軍が南部抵抗者を討伐するに当って、いたるところの村落を焼き、老若男女を問わず、無差別に殺りくを行なったことに對し、怒りの声を發しました。この人道的立場から發した怒りの声は「阿公店問題」として世界的ニュースとな

り、その後の日本軍の行動に制約を与えたのです。虐げられた弱者の側に立ち、当時の権勢に媚びなかったフアガソンは、台湾人の心に銘記され、語り伝えられています。

伝道の最も基本的な神の働きと人間の関係が、人為的な権力と人間とにすりかえられ、権威をもって利で誘い、屈服させるというようになり、それはすでに真理の道から離れたものだと思うのです。

*

この時期の日本人教会は、台湾人に対して無関心であり、この無関心は、日本統治の五十年間続きました。「日本の諸基督教会は、日本が台湾を占領した後、すぐ在台湾の日本人に関心を持ち、伝道を開始した。」また「日本基督教伝道局は、台湾伝道の緊急必要性を感じ、一八九六年六月、河合龜輔牧師を派遣し、在台日本人に伝道した」と楊士義、郭和烈両牧師はおの台湾基督長老教会百年史の中で述べております。

日本教会へ台湾人が出席するのはごくまれであり、台湾人教会へ日本人が出席することはもちろんありませんでした。年配の信徒は「日本教会には優越感があって、人を庄する

冷たい空気が流れていた」と述べております。実際わたしの属する教会（前日本台中基督教会）では、現在に至っても「温亜隣は勇気がある」と彼の日本教会へ出入りしたことに対して、賞讃とも嘲笑とも似つかぬ言葉がなげかけられております。また日本人によって書かれた「陳夫人」という小説にこういうくだりがあります。

「清文は英国長老教会に属していた。これは台湾で最も古い歴史を持ち、最も勢力のある基督教々派で、信徒も殆ど本島人に限られている。清文は子供の時分そこで教育された関係上、現在もその方へ通っていた。安子の方は日本基督教教会なので、夫婦別々の教会に行っていたのであった……」

クリスマスの晩のことであった。清文は安子の方の教会をちょっとのぞいてみることにした……

清文は後の人に押され気味にその受付の前に出てしまった。と受付の男は両手を拡げて遮りながら咎めた。

『汝、不可々々』と彼は下手な台湾語で云ひ、それから口の中でぶつぶつ云った。『仕様がないな。チャンまで入り込んで来やがる。』

清文は呆氣にとられた。このような傲慢不遜な無神経な態度を、少なくともクリスマンたるものが示し得るものだろうか。意外だった。意外が怒りに変って来て、思わず激しい目付で相手を見直した。……羅紗の詰襟の服から官吏の端くれだと直ぐ分った……」

かえて、日本へ留学にきていた台湾人を日本の教会は暖かく迎え入れ、父らは当時大阪の南大阪教会で長老をしていた阪田素夫氏に厚遇され、氏が逝去されるまで親交を重ねておりました。当時の留学生たちは一様に台湾にいるよりも差別をうけないと語っております。

ここで考えさせられるのは、基督教信徒は神の御前では平等であり、教会は植民地統治者、被統治者という枠を超越したものであるという真理が、台湾では完全に踏みじられていたことです。植民地というゆがめられた政治体制は、教会内の人間関係までもゆがめてしまったのです。日本人が台湾人に対し、または台湾人が日本人に対しての伝道は五十年間行なわれず、互いに沈黙を守り続けたのは異常だと思えます。基督教は政治、経済、社会全般から独立して、自分の殻の中に

とじこめることはできない。それともそれから超越した一層高い次元にあるべきなのでしょうか。五十年間、なぜ基督教の信仰は、植民地統治者と被統治者のゆがめられた関係を打破できなかったのか？ と考えこんでしまいます。

一九三六年、蘆溝橋事件が始まると、台湾総督府の台湾人に対するいわゆる皇民化運動が強力に行なわれました。これは同化政策であって、日本語常用、神道の強制的礼拝、日本名への改姓名等が行なわれました。その中でも教会に対する管制と圧迫は激しく、礼拝には特高が出席するというものもしませんでした。特に真珠湾攻撃が行なわれてからは、基督教への圧迫は度合を深め、劉振芳、李幫助、陳清義の三牧師は三週間憲兵隊へ拉致されたり、台湾人伝道師は三班に分れて台北市の「大直国民精神研修所」で練成会に参加させられたりしました。「天照大神の御前で日本精神と国体の本義をたたきこまれ、戦、坐禅、祝詞の神道教義を教えられて、最後にはかがり火を囲み、皇民の信念と決意を述べさせられた」とのことです。台湾の教会も大勢になびいて、礼拝前の宮城遙拜、国歌の斉

唱、神棚の礼拝室内設置を行なったのです。

これに比べると、同じ、またはいつそう痛ましい状況下におかれていた山地の基督者、伝道者は信仰の純粹さ、立派さにおいては一段と光り輝いています。花蓮教会の台湾人牧師高端莊、タロロ族の坂口、Dowai, Chioan, Wlian Takko. そして日本人の医療伝道者井上伊之助氏らは、当局の迫害にもかかわらず、妥協を求めずに信仰を守り続け、ついに発狂、あるいは殉教、牢獄の苦難に耐え、初代基督教徒の信仰を再現したのです。

日本本土においても、迫害、弾圧を受けた牧師、信徒がいたと聞きますが、在台湾の日本教会は、時局への協調を主張し、当局の要求を受け入れ、わたしの知る限りでは、基督教圧迫への抵抗はなかったようです。それだけにとどまらず、「北支事変全台湾基督教奉仕会」を組織し、その支部的存在の「台湾基督教奉公会」を全島各地に置き、「米英両国の宣戦聖旨を奉戴し、皇国民の本分を発揮し基督教報国の責任を尽し、皇民練成を目的とする」の目標をかかげたのでした。台湾人の教会を「日本基督教台湾教団」に組み入れるため、総督府文教局の指導、あっせんを求めた

反面、前記三牧師が憲兵隊に捕えられた時、台湾人より優位にあった日本人は、同じくキリストに属する者として、それらの釈放に力を貸さず、日本語のあまりわからぬ信徒が憲兵隊のまわりを右往左往したのみと関係者は述懐しています。植民地という異常な環境下のクリスチャンは、やはり統治者として、国家権力に加担しなければならなかった。クリスチャンとしてよりも植民地統治者として国家権力の前に沈黙せざるを得なかったと思うのです。

*

現在の日本基督教教会と台湾基督教教会は、植民地、被植民地という枠から脱して平等な立場にあります。過去のきずなから台湾へ伝道に出かける日本人の基督者、日本へ学問の精進を求めてくる台湾人の基督者で往来は賑わっています。しかし、どれくらい日本人基督者が台湾の現状をはっきり認識しているのでしょうか。台湾の小学校五年生の国語教科書にこんな詩がのっています。

とうとう殺す時がきた

しかし月が真昼のように明るいと

敵を殺す手が鈍る

月よ、月よ

明日の朝は黒雲の後にかくれておくれ、
朝早く敵陣へのりこむのだから。

詩の心も、言葉の美しさもないこのような戦意昂揚の詩が、五、六年生の四冊の国語教科書（国定教科書）に六篇ものっているのです。反攻大陸を国是とし、国家予算の85%以上を軍備に費やし、戦争を叫ぶ現在の台湾は、戦前の日本といささかの変わりもありません。平和を唱えるものには思想犯のレッテルがはられ、流刑、投獄、あるいは死刑の軍事裁判が待ち構えているのです。

去年、台湾長老基督教第十四回総会が開かれた時、政府は内政部専員康俊璧を派遣し、「わたしは中華民国基督教協会総幹事として、台湾長老基督教会が、基督教の世界的機構であるWCC（World Councils of Churches）から脱退することを望む」と発言しました。理由はWCCがベトナム北爆に対し抗議のステートメントをアメリカ国民に送ったからなのです。七星中会、台北中会、台中中会の牧師、議員が相次いで賛成演説をしました。政府派遣の高官を前に、多くの代表者は沈黙しこの提案は通るのかのように見えまし

が、前議長張逢昌牧師は詩篇六十篇十二節の「われらは神によって勇ましく」の言葉を引用し、「会期中に急いで結論を出す必要はない、委員会をつくり、研究しよう」と提案し、難関をきりぬけました。この問題のその後の進展について、台湾からくる牧師は一樣に口をとぎし、語りたがりません。

「地には平和を」の叫びは、戦争の雄叫びによって、台湾ではかき消されそうです。日本から多くのクリスチャン、伝道者が台湾を訪問しています。平和について語ったことがあるでしょうか？ 過去の日本教会が犯したのと同じ弱さを繰返してはいけない、と諫言したことがあるでしょうか？

現在の台湾に必要なのは、過去に対する郷愁から、または日本語が通じるから、または蔣総統、張群秘書長と親しく言葉をかわすことができるから、というために出かけるクリスチャン、伝道者ではないのです。WCCの問題はほんの一例にしすぎません。台湾のクリスチャンは、今もなお、国家権力の圧迫というイバラの道をくぐりぬけなければならぬ試練が待ち構えているのです。それがどんなに耐えがたいものか、日本のクリスチャ

ンは知っておられます。日本と歴史的にも、地理的にも近い台湾にいるクリスチャンが、立派に試練に耐え得るよう、手をさしのべ、励まして下さるよう祈っております。

台湾の歴史は植民地の歴史であり、過去統治者と被統治者の間に相剋がありました。貧しい知識の中からそれらについて少しばかり述べてきましたが、それは誰の罪悪をも責めるためではなく、この歴史を人類共有の財産の一部として、お互いの心に銘記し、再びこのようなことがいかなる地域においても繰り返されないことを願ったからです。

人類の進歩は、共通のものであります。世界の一部が、いかに繁栄していても、ある一部が貧困にさいなまれていては、その繁栄もいつかはくずれ去る虚しいものです。台湾の教会が抱えている問題も、台湾人だけのものではなく、人類がかかえている数多くの問題の一つであり、お互いに協力してこそ、早期に解決し、互いに前進し得るのではないかと思います。

（主婦）